

# 浦賀文化

平成20(2008)年1月1日

第13号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

編集・発行:横須賀市浦賀文化センター(郷土資料館)

〒239-0822 横須賀市浦賀 7-2-1

TEL&FAX 046-842-4121

## 二つの大きな慰霊碑

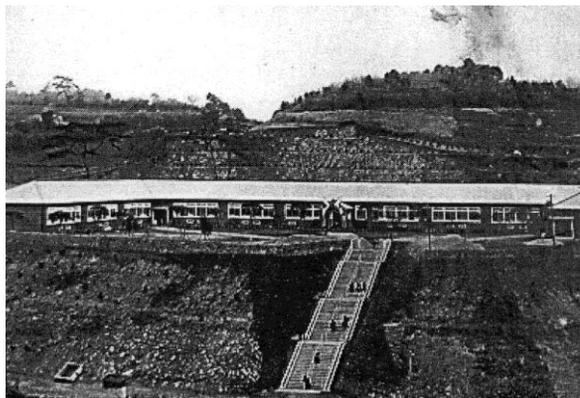
### 「忠魂碑」と「関東大震災慰霊塔」

浦賀の東と西に町の人々により建てられた大きな慰霊塔があります。東林寺境内にある「忠魂碑」と西浦賀渡船場脇にある「関東大震災慰霊塔」です。犠牲者を悼み平和を願った石碑です。

横須賀市で最も古い公園(明治二十四年開園)である愛宕園(愛宕山)には現在四つの石碑があります。中島三郎助の二つの招魂碑、咸臨丸出港の碑、与謝野鉄幹・晶子夫妻の歌碑です。しかし、もう一つ石碑があったことはあまり知られていません。それは、現在東林寺にある忠魂碑です。

忠魂碑は、碑の後ろにある建設発起人の碑と新横須賀市史に記載されている「忠魂碑建設費寄付者氏名及び収支精算(宮井家所蔵文書)」によると、明治二十(一八九七年)三月に建立されています。日清戦争に従軍し戦病死した浦賀町民の慰霊のために、町の人々が発起人と

### うらがの寫眞館 -高坂小学校-



開校当初の尋常高坂小学校(高坂・創立80周年記念号より)

西叶神社境内にあった浦賀小学校の分教場は、大正四年以降、浦賀造船所の拡張に伴い、児童数が増加し収容が困難となった。又、校舎の老朽化と採光が不十分で、運動場がなく、児童は奉行所跡などで運動をし、何かにつけて不便を感じていた。地元から新設の小学校を要望する声が大きくなり、大正八年浦賀町町議会でも決された。大正九年には地鎮祭が執行され設立に向けて着々と工事は進んでいったが、大正十二年九月の関東大震災で建設作業は中断してしまつた。再び工事が始まつたのは大正十四年になってからで、翌十五年に竣工し、同年四月四日によろやく開校式を迎えた。

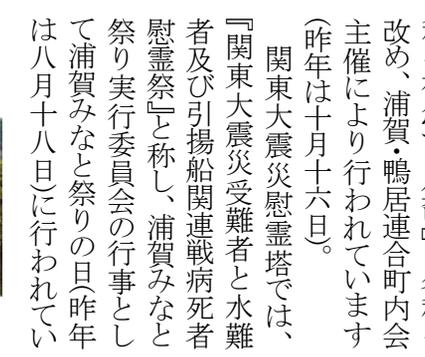
は忠魂碑の左にある「井上龜之助氏顕彰碑」に記されています。忠魂碑の移設は、震災が原因ですが、時々の背景も影響し現在の位置にあるといえるのかもしれない。関東大震災は、浦賀の町に大きな犠牲を強いました。中でも愛宕山の山崩れは西浦賀の蛇島から紺屋町にかけて民家七十四戸、住民百人余りを飲み込み、浦賀港の一部を埋めてしまいました。犠牲者の慰霊に西浦賀渡船場脇に建っているのが「関東大震災慰霊塔」です。浦賀町が建立した碑は、終戦後撤去されていきましたが、震災五十周年に町内の賛同を得て再建(昭和四十七年九月一日)されました。崩れた土砂は、埋め立てに使用され、久比里坂へと通じるバス通り(国道二〇八号線、浦賀港線)に生まれ変わっています。



愛宕山の「忠魂碑」  
浦賀名所絵はがきの一枚  
大正十一年六月と記されています



昭和22年2月に移設された東林寺の「忠魂碑」  
左は「井上龜之助氏顕彰碑」



再建された「関東大震災慰霊塔」

居地区戦争犠牲者を慰め平和を祈念する集い」と名称を改め、浦賀・鴨居連合町内会主催により行われています(昨年は十月十六日)。

自然災害であれ戦争であれそれぞれ時代の生き、犠牲となった人々に敬意を払うことは、今を生きる者にとって必要なことではないでしょうか。

浦賀文化センター (郷土資料館)

浦賀駅から浦賀通りを徒歩10分

至大津 京急浦賀駅 至観音崎 浦賀港 至久里浜

所在地:横須賀市浦賀7-2-1  
電話: 046-842-4121  
FAX:

- 忠魂碑  
題字 大山巖  
(明治の元勲・元帥 高さ約二八〇cm 幅約一〇cm)
- 関東大震災慰霊塔  
題字 東福八十翁勝剛 (東福寺前住職)  
(高さ一九七cm、幅一七七cm)

### 歴史講座開催される

今年度の歴史講座が11月14日～12月12日まで全5回、山本詔一さんをお迎えし「奉行所と浦賀の町」と題し、奉行所跡への散策を交え、浦賀の町の移り変わりを学びました。次回も多数のご応募をお待ちしています。

### 【特別展示会】 のお知らせ

### 第十九回 「浦賀の百年」

なつかしやうの出会い  
二月九日(土)から二十四日(日)まで特別展を開催します。懐かしい、わが街・浦賀を現わす予定です。また、山本詔一さんの基調講演が二月九日(土)十三時三十分～十五時まで浦賀公民館集会所に於いて行われます。基調講演、特別展示会共に、皆様のご来場をお待ちしています。

### 東西風

浦賀の歴史や文化の中で、今発信できる旬のものを採り、お届けしようと思っかけているのですが、なかなか思うようにいきません。これからも紙面に対しての叱咤・激励をお願いします。

今年は四月から、今までの教育委員会の生涯学習課の所管を離れ、市民部の所管になることが決まっています。が、機構が変わることによって、どのようにならざるのか、詳細は検討中ですが、どうも市民協働事業の促進に一役を担うことになりそうです。いずれにしても、市民の方に愛される浦賀文化センターでいたいと思っています。(山本)

法要は毎年行われています。忠魂碑は、戦没者慰霊祭を平成十九年から「浦賀・鴨」

### 浦賀の植物

#### クロガネモチ

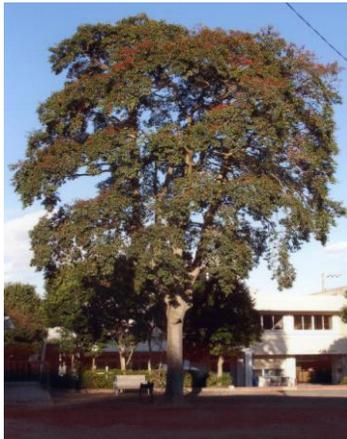
モチノキ科

浦賀文化センター前に素晴らしいクロガネモチの大きな木がありま。厳寒のさなか冬枯れの彩りを失ったところに冬の赤い実は映えるもの。ナンテン、ピラカンサス、センリョウ、マンリョウ、ウモドキなど。それに遠くからでも赤い実のなかに常緑の葉が見え晴々として固まっついている目の覚めるようなクロガネモチの樹。聞くところによると、ここは五十数年前は浦賀ドックのテニスコートがあり、すでにクロガネモチの樹皮から小鳥やトンボ取りに利用したといわ

#### 大前 悦宏

神奈川県植物誌調査員

浦賀文化センター前、初冬に向かう決意のことに、初冬に向かう決意のことに赤い実を次々に落下させていました。静かで晴れて風もない、人もいない夕方、夕立のような果実の落下の音だけがポツポツと、ポツポツとあたかも私に話しかけているように何十、何百の赤い実が地面に「絵」を見せてくれました。植物は一見静かな存在にみられがちですが、このときはばかりは動的で生き生きとした生命のエネルギーの営みを体感できました。ほかに大きな木といえは防衛大学正門前の人を楽しませるに値する三本のクロガネモチや、霧囲気を明るくしてくれる三浦市上宮田のものなどがあります。クロガネモチは常緑で高木になり東アジアの温暖帯から亜熱帯に分布し九州、インドシナ半



赤い実の絵の中にそびえ立つ浦賀七丁目公園（文化センター前公園）のクロガネモチ

浦賀の北部に横浜横須賀道路のインターチェンジの工事が大分進んできました。平成二十一年に開通とのことですが、交通量は増えるのでしょうか。

この高速道路のルートはヤマトケルが葉山町木古庭から池上、吉井、安房口神社を通り走水に向かった道にほぼ平行し

### 笑話一題

ていて、古東海道が思い浮かびます。今日の車社会では一日で走ってしまう距離もその当時は都から幾日くらいかかったのでしょうか。便利になり昔の面影が失われることは寂しいことですが、観光客が増え、浦賀が活性化するとに期待したいと思ひます。

### 展示室情報

#### 浦賀湊の厳戒態勢

本年五月、岡山県新見市で見つかった浦賀沖に現れた米国船の彩色図(複写)を展示しました。「亜墨利加(アメリカ)国船渡来(浦賀湊)二(弘化二年)」などの表記があるところから、ペリヤ艦隊の黒船来航の八年前、弘化二年三月に日本人漂流民を乗せた米国捕鯨船マンハッタン号が浦賀に入港した際の様子を描いたもの。星条旗を翻した帆船を、葵の紋や大名の旗印がなびく御備船(おそなえぶね)や小舟を取り囲み緊迫した様子が漂い、幕府の厳戒態勢が見取れます。帆船の乗組員、小舟の藩士も細かく描かれています。

マンハッタン号来航の図



### 砲術家の常駐を願うが



郷土史家 山本 詔一

ビッドル提督に率いられたアメリカ東インド艦隊の二隻の軍艦に驚異を感じた幕府は、江戸湾の防衛体制を根本的に見直し、それまでの三浦半島と房総半島の備えの強化が図られた。

この強化策で浦賀奉行所は防衛の拠点に位置付けられた。二人の奉行も変わり、新防衛策に基づいた組織づくりが始まった。そのひとつとして奉行所に砲術師範を置くことの願ひ書が弘化五(一八四八)年一月、幕府に提出された。

この願書を読むと、砲術師範として招聘されたのは、内田弥太郎と言う人物であった。内田は伊賀の人で、砲術に関してはもちろんであるが、その他に測量術とオランダ語にも通じている才能豊かな人物であり、そのうえ人柄も誠実でよく働くと記されている。

そんな内田であるが、現在の勤務場所は大勢の人がいる割には御用が少なくところであるので、彼の才能を引き出すチャンスがない。そこへいくと浦賀は、近年異国船が度々来航し、防衛策強化が図られている。

砲術に関しては、これまでも稽古はしていたが、西洋式の砲術は一部の人以上には、格別の訓練もしていない。それは西洋式の砲術は、打ち方だけを習っても役に立たず、地形や海面の測量などとともに熟練しなければ有益とは言えない。ということ、そこまで熟練しなければ意味がないと取り組みを躊躇していたばかりか、西洋式の砲術訓練はしたくないという風潮になりつつある。こうした状況を

### 歴史 語りい座・浦賀 ⑬

打破するには、どうしても内田の手が必要であることを強調している。

実は内田が浦賀と関わりを持つのは、これが始めてではなかった。天保八(一八三七)年、日本人漂流民を乗せて浦賀へ来航したアメリカ船モリソン号を無二念打ち払い令によつて、砲撃を加え追い払った事件があった。この事件は人道に反する行為であったとして、世界中から非難され、江戸幕府は対外政策の転換を迫られたことがあった。

対外政策を転換するためには、防衛問題の見直しが必要で、時の老中・水野忠邦は鳥居耀蔵に現場の調査を託した。しかし、この人選に不満をもった代官江川太郎左衛門は、自ら名乗りでて、鳥居と自分の調査結果を見比べて欲しい旨を願った。その時の江川側の測量担当者として名前が上がっていたのが、内田であった。

内田の浦賀勤務は、異国船が渡来する時期の二月から九月までとし、その間に西洋式砲術の稽古、測量術から軍船との駆け引きまで幅広い教授を願った。

また、内田への報酬は、今まで萩野流砲術の稽古をしてくれた桜井代五郎・貞二の分の御手当て金十兩、人馬証文・賄い道具代銀四枚や雑用金一ヶ月二兩

防衛の拠点と位置づけられた浦賀奉行所の模型



内田が浦賀へ来て、西洋式の砲術を教えた形跡は今のところ見当たらない。